第45回 2025年度

「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者発表（敬称略）

受賞者名・作品タイトルをクリックすると作品に移動します

【文部科学大臣賞】

兵庫県立阪神昆陽高等学校　一年
嘉納美波　**一冊の本がつないだ縁**
（体験書籍『怪談売買録　死季』宇津呂鹿太郎　竹書房）

【全国高等学校長協会賞】

北海道札幌南高等学校　二年
北村柚乃　**燃やすべきは**
（体験書籍『金閣寺』三島由紀夫　新潮社）

【全国高等学校長協会賞】

青森県　青森明の星高等学校　三年
船橋拓実　**私の心の奥底に眠る言葉**
（体験書籍『はじめての短歌』穂村　弘　河出書房新社）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

秋田県立大曲高等学校　一年
小原理子　**「ちょっとだけ」の思いやり**
（体験書籍『ちょっとだけ』瀧村有子　絵／鈴木永子　福音館書店）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

新潟県立三条高等学校　一年
向井理湖　**読書を知る**
（体験書籍『本を読んだことがない32歳がはじめて本を読む』かまど　みくのしん　大和書房）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

岐阜県立岐阜北高等学校　二年
北川蒼太　**僕の思う〝理解〟**
（体験書籍『息子のボーイフレンド』秋吉理香子　双葉社）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

京都府立嵯峨野高等学校　一年
牧野菜々子　**音楽を世界に連れ出して**
（体験書籍『蜜蜂と遠雷』恩田　陸　幻冬舎）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

熊本県　熊本信愛女学院高等学校　二年
金山夕姫乃　**愛の数式、私たちの解**
（体験書籍『博士の愛した数式』小川洋子　新潮社）

第45回 2025年度「全国高校生読書体験記コンクール」について

このコンクールは、公益財団法人　一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社のご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」とともに実施している事業です。多くの高校生ができるだけたくさんの本と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのように行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

第45回の本年度は、全国47都道府県から414校の参加があり、応募作品は55、961編となりました。

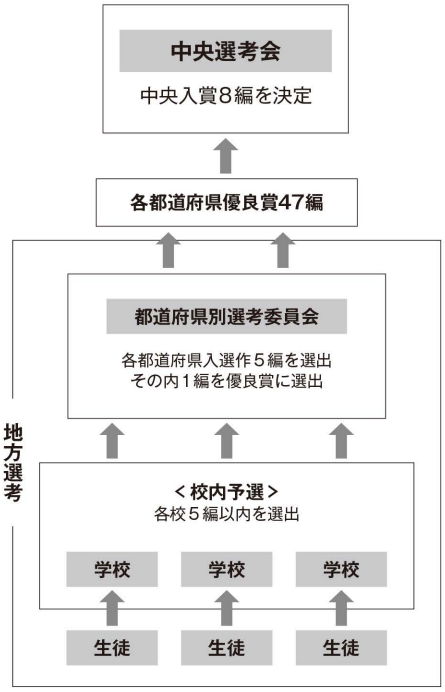
【選考】

◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。

◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考会に送られました。

◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。

【作品の応募と選考の流れ】



【賞】

中央入賞　8名

・文部科学大臣賞　1名　賞状・楯・記念品
・全国高等学校長協会賞　2名　賞状・楯・記念品
・一ツ橋文芸教育振興会賞　5名　賞状・楯・記念品

＊中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

優良賞　39名　賞状・記念品

＊優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫50冊セット」を贈呈します。

入選　188名　賞状・記念品

＊入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

【中央選考委員（敬称略）】

辻原　登（作家）
穂村　弘（歌人）
角田光代（作家）
田村　学（文部科学省初等中等教育局主任視学官）
林　達也（全国高等学校長協会）

【主催】

公益財団法人　一ツ橋文芸教育振興会

【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・南日本新聞社・琉球新報社

【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部・青森県高等学校文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」

【文部科学大臣賞】

一冊の本がつないだ縁

兵庫県立阪神昆陽高等学校　一年

嘉納美波

三年前の夏休み、私はこの本に命を救われた。そしてこの本がつないだ縁が私の後の人生にここまで希望をもたらしてくれるとは、当時の私には全く想像ができなかった。ここでは、ありのままの私の思いと経験を綴っていこうと思う。

私は中学三年間、陰湿ないじめを受けていた。せっかく中学受験をして、合格できた中学校でのことである。それは、中学一年の六月に突然始まった。仲良くしていた子たちに悪口を言われるようになってから、物を隠されたり、無視をされたり、汚い物として扱われるようになるまで、それほど時間はかからなかった。その時は辛いという気持ちよりかは、戸惑いの方が大きく、どうすれば良いのかが分からなかった。そのまま夏休みに入ったのだが、私の心は自分でも驚くほどボロボロになっていた。次に登校した時に同じことをされるくらいなら、死んだ方がマシだ。そんなことを考えるまでになっていたのだ。そんなある日、たまたま見たテレビでこの本の著者である宇津呂鹿太郎さんが紹介されていた。元々怖い話が好きだった私は、宇津呂さんの怪談語りと、怪談に寄り添う姿勢に魅了された。すぐにスマホで調べると、本も出されており、一番上の検索結果にこの本が出てきた。母に購入してもらい読み始めると、そこには、優しい世界が広がっていた。宇津呂さんの怪談に対する真っすぐな思いや、話を提供する人への寄り添い方が、私が持っていた怪談のイメージとは全然違っていた。「この人に会うまで生きよう」そう思った。また、実際に経験した怖い話を宇津呂さんに提供する人々の十人十色の生き方や生い立ち、考え方にも、「私もこのまま

でいいのかもしれない」と心が温かくなった。私は夏休みの間、繰り返しこの本を読んだ。学校のことを思い出して辛くなった時も、この本を開けば優しくて温かい世界が広がっている。そう思うことができ、生きて夏休み明けを迎えられた。しかしこの気持ちも、学校が始まり、いじめが更に酷(ひど)くなると、長くは続かなかった。そんな時、私の住む地域で宇津呂さんのイベントが開催され、ドキドキしながらそれに参加した。終演後、この本へのサインを頂けた。サインを書いて下さっている間も話をして下さり、本当に優しい方だと感じた。そこから、両親の協力もあり、イベントに行くうちに顔を覚えて頂けた。このつながりは、中学二年生になり、学校に行けなくなった時も大きな支えとなった。いつの間にか、私の心には「宇津呂さんのような怪談師になりたい」という夢ができていた。

中学三年生になってすぐ、たくさんのご縁が重なり、私は宇津呂さんに怪談の語り方や表現について、稽古をつけて頂くようになった。そのおかげで、自信がつき、別室登校という形で、学校に行けるようになった。あと何日がんばったら、自分の尊敬する人に稽古をつけて頂けるからがんばろうと、月に二回の稽古が私にとってはご褒美のようなものになった。また、稽古の中で宇津呂さんは私に技術だけでなく、立ち居振る舞いや礼儀について、人として大切なことを教えて下さった。その中でも「自分を一番下に見る」という言葉が印象に残っている。これは自分を卑下するということではなく、謙虚に生きるということだと仰(おっしゃ)っていた。この言葉と説明は私の心にすごく響いた。この他にも、心に響く言葉はたくさんあり、ずっと大切にしていきたいと思う。

現在、私は自分で選んだ多部制の高校に進学し、中学の時はあまりできなかった勉強に部活、そして怪談の稽古と、充実した毎日を送っている。今も、中学二年の時に抱いた、「宇津呂さんのような怪談師になりたい」という夢は変わっておらず、怪談語りや表現について、宇津呂さんに教えて頂きながら、夢に向かってがんばっている。

高校生になって新しく始めたことがある。それはいじめの経験から、月に一回インターネット上で自分の思いを話したり、同じような悩みを抱える人たちと思いを共有したりする活動だ。あの時の私が、この一冊の本に救われたように、私もギリギリのところで何とか踏みとどまっている人の支えになりたいと思い、この活動を始めた。

怪談という個性的なジャンルの中で出会えた一冊の本は、ボロボロだった私にたくさんの希望とご縁をもたらしてくれた。あの夏、もしこの本に出会えていなければ。そう考えるとすごく怖くなる。だから、私はこの本に出会えたことと、この本の著者の宇津呂さんに出会えたことに改めて感謝を伝えたい。

最後に、私の夢を宣言したい。私は将来、フリースクールの先生をしながら、怪談師として活動していきたい。宇津呂さんのような、人に寄り添える怪談師に、さらには、自分なりの幸せをつかんだ、世界一幸せな怪談師に私はなる。

体験書籍
『怪談売買録　死季』宇津呂鹿太郎　竹書房

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」

【全国高等学校長協会賞】

燃やすべきは

北海道札幌南高等学校　二年

北村柚乃

私を縛り付け、なおも私を救うものは数字である。私を評価しようとするあらゆる数字である。数値化される優劣において「優」であることが自分の掟であった。

四方を山に囲まれた田舎町で結果を追い求めて生きていた。競争が殆どない環境で、自分が独走している状態にあることの快感を覚えた。成績はオール五を目指し、テストは満点が取れないと悔しくてテスト用紙を破いたこともあった。英検二級を持つ者は周りにいなかったし、地域の書道や作文のコンクールでも上位を狙った。幾重にも重なる賞状を眺めては、その厚みが自分の実力の確かな証明のように思えて安堵した。

こうした充足を感じると、得体の知れない後ろめたさのようなものが心の奥に現れるのである。自惚れに深く沈んでゆく私を見るもう一人の自分の姿を認める。私は井の中の蛙に過ぎず、いつかは夢中でかき集めた数字が何の意味も持たなくなることをずっと前から知っていた。それでも私は今まで、遠くにいる自分との対峙を避けてきた。その輪郭が見えてしまったら、築いてきた数字の牙城が瓦解するとわかっていたから。自分が出した結果に満足するほど、結果を出せない自分に対して価値を見いだせない。数字を重ねることだけが私が存在する意味を成しているように思えた。

また、私は友達に共鳴することが苦手だった。自分は孤高の存在だと、名誉ある孤独を貫いているのだと自分を錯覚させることで劣等感を独自性にすり替えた。作中の吃音と質は違えど、対人能力の欠如は自分にとっては不具であり、隠そうとする意識があった。だから、他人の理解を得ることを嫌った。他人に理解されるということは

自分が大した人間ではないことが露呈するのと同義だった。ここに数字を追い求める理由の一つがあるように思う。私はその他大勢になることをひどく恐れていた。数字は、その他大勢以上であることを客観的に示す指標だった。私は数字を掲げることで、無言のうちに自分は簡単に理解できる人間ではないと主張していた。人間関係が上手くいかないときも数字だけが揺るがぬ自信の源だった。

私は中学校の図書室で『金閣寺』と出会う。溝口が完璧な理想の金閣を愛し、それに翻弄される様が数字による呪縛と呼応したとき、戦慄が走った。溝口が陶酔した金閣の美はやがて呪詛となり、溝口は金閣が戦火によって焼失することを願った。だが金閣は燃えぬまま終戦を迎える。完璧な美の理想を破壊できるのは溝口自身だけだった。

溝口の友人が「君は自分を大事にしすぎている。だから自分と一緒に、自分の吃りも大事にしすぎているんじゃないか」と発したとき、私は身ぐるみ剝がされたような気がした。数字として結果を残せる自分だけを愛してきて、それ故不完全な部分を抱えていることが許せなかった。積み上げた数字の下で欠けた部分が浮き彫りになる。沢山成果をあげて理想に近づいても、欠点が自分の思う完璧の邪魔をしているように感じた。数字が私の存在意義として機能するには、欠点すら理想に内包されなければならなかった。

高校は親元を離れ所謂進学校に入った。合格を手にした満足を感じると同時に、この高校に入れば上位であり続けることはできないだろうから、数字に対する諦めがつくのではないかと密かに願ってもいた。数字のほうが離れていけば、私も数字を追わなくなるだろうと思っていたのだ。しかし数字が簡単に手に入らなくなると、私の金閣はさらに大きさを増した。自分と同等な能力を備えた集団の中で自分は埋もれ、欲しい数字は遠ざかり、もがけばもがくほどに数字が意識に張り付いて離れなかった。数字は望み通りに自ずと離れていってはくれなかった。数字に救われるよりも圧迫されることのほうが多くなった。溝口が金閣のせいで自分は人生から隔てられていると感じるようになった頃には、金閣の美に心奪われるというより呪詛としての性格が強くなっていたと思う。私は溝口のように、理想を強く思いすぎて抗えない状態に達しつつあった。

数字がもはや軛となったときから、私から数字を取り上げたら何が残るだろうと何度も自分に問うてきた。十七年間の私を私たらしめるのが数字だけだなんて、あまりにも虚しい。数字を手放したいと思っても、逃げているだけだという気持ちが再び私を数字に向かわせた。しかし、理想を壊さないと自分が破滅してしまう。数字を追ううちに見逃したことが数多くあっただろう。何が本当に好きなのか、何に心が動かされるのか、自分のことなのにわからなくなってしまった。心の赴くままに自分がやりたいと思うものを持ちたい。それを探すことを生きる目的にしたい。自分で自分の首を絞めながら精神を削る生き方に終止符を打つことを望む。私は今、鏡湖池の前に立つ。

「金閣を焼かなければならぬ」

体験書籍
『金閣寺』三島由紀夫　新潮社

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」

【全国高等学校長協会賞】

私の心の奥底に眠る言葉

青森県 青森明の星高等学校 三年

船橋拓実

「短歌ってよくわからない」

私は常々、そう思っていた。私が最初に短歌を作ったのは、高校一年の四月。何の気なしに文芸部の見学に行った際に、せっかくだからと先輩に言われて短歌を作った。先輩が持つ国語辞典から適当に引いた言葉を題として、その場で即詠をした。その時は二つ題があり、その内の一つが「雲間」という題だった。短歌は国語の授業で教科書を通してでしか読んだことがなく、短歌をろくに詠んだことがない私がすぐに作れる訳がない、と内心で強く思った。雲の間を想像していると、原爆や空爆などの戦火の様子が思い浮かんだ。

雲間から突き刺す閃光広島の走る少女の食べかけのアイス

原爆投下により日常が非日常に変わる様子を頭の中で想像し、そのワンシーンを切り取って作ったのが、私の短歌作りの最初だ。そこから四か月、盛岡で開催される全国高校生短歌大会（短歌甲子園）に出場することになった。先輩三人と団体戦に出ることが分かり、足を引っ張りたくない一心で、いろいろな歌人の歌集を読み、短歌を創作した。

老眼の父の見ている古本の栞代わりにレシートを挟む

大会では全国優勝を果たせたが、何が正解なのかがわからなかった。大会で披露された全国の高校生たちの短歌は、社会性や政治的な背景を表したものや固有名詞を出したりほとんど漢字だったりなど、自由な短歌が様々あった。そのような短歌と触れ合う中で、自分の個性とは何なのだろうと思うようになった。短歌がよくわからなくなっていった。

高校二年になり、作風を変えてみるなど、自分なりに短歌について考えるようになった。今までは自分の気持ちを何かに喩えて表現し、日常の少しドラマチックな瞬間をそのまま短歌に落とし込むような創作をしていた。

帰り道あなたの影を踏みながら歩くと一つになれる気がした

そこから俵万智に倣って、日常の何気ない場面を歌にして創作してみたが、俵万智の作品のような魅力的なものにはならなかった。自分の中で試行錯誤をしながら短歌と向き合い、考える過程で出会ったのが、穂村弘の著書『はじめての短歌』だった。良い短歌とその改悪例から、優れた短歌とはどういうものなのかが論理的に説明されていた。私はそれまで自分の感覚で短歌を創作していたが、論理的かつ自分の感覚に縛られない自由な短歌を作ろうと思うようになった。

私がこの本の中で、特に好きで影響を受けた短歌が二つある。一つ目が、この本で一番初めに紹介される平岡あみさんの短歌だ。

空き巣でも入ったのかと思うほどわたしの部屋はそういう状態

空き巣でも入ったのかと思うほどわたしの部屋は散らかっている　（改悪例）

最後の「そういう状態」という表現が、短歌の良さそのものを表している。改悪例の「散らかっている」ではダメだ。「そういう状態」とは、どういう状態なのかを読者の想像に委ねているのに対し、「散らかっている」ではただの事実を情報として読者に差し出している。短歌は読者の想像を掻き立て、記憶や経験を呼び起こすことが大切だ。それからは、事実をそのまま書かないよう意識して、短歌を創作するようになった。

二つ目は、やすたけまりさんの短歌だ。

「煤」「スイス」「スターバックス」「すりガラス」「すぐむきになるきみがすきです」

非常に計算された短歌で、とても面白い。かなり好きな短歌だ。しりとりをしている二人。一人はしりとりで、「す攻め」をするくらい負けず嫌いで「すぐむきになる」人。そんなすぐむきになる所も含めて「すきです」と愛の告白をしりとりで伝える、もう一人。そうした構図を思い浮かべることができる、自由でロマンチックな短歌だ。

私は「短歌ってよくわからない」と、常々そう思っていた。だが、この本を読んで自分なりの短歌への解答ができた気がする。与謝野晶子や石川啄木などの明治や大正時代の短歌は勿論、現代短歌を読みながら、時代・性別・立場など、何もかも違う人が作った短歌が心に響くのはなぜだろう。答えは一つだけだと思う。短歌は、自由なものだからだ。言葉は有限であり、日常の中で語り尽くされ手垢のついた表現ばかりの中で、自分の心の奥底に眠る言葉の連なりを探し紡ぎ出すことで、自分だけの自由な短歌が生まれる。それはどの時代の歌人も同じなのではないか。時代を超えて、共感よりももっと力強い衝撃・発見として短歌はその存在感を増していくだろう。

来春、私は大学へ進学予定だ。文芸創作を生涯の目標とし、人々の孤独に向き合う作品研究に励むつもりだ。そして短歌をこれからも作り続ける。

「人生」というハイウェイでカーナビに夢を打ち込む　十八の春

体験書籍
『はじめての短歌』穂村　弘　河出書房新社

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

「ちょっとだけ」の思いやり

秋田県立大曲高等学校　一年

小原理子

絵本のタイトルであり、絵本の中で繰り返される「ちょっとだけ」という言葉。「ちょっとだけ」という気持ちによって、救われることや傷つくことがある。

赤ちゃんが生まれてお姉ちゃんになったなっちゃんは、今までよりも「ちょっとだけ」我慢したりチャレンジしたり寂しい思いをしたり、だけど時々赤ちゃんにも「ちょっとだけ」我慢をしてもらったり。お姉ちゃんになったなっちゃんを描いた絵本。

私がこの絵本を両親からもらったのはいつのことだろうか。私には三歳下の弟がいる。今の記憶にある限り、私は弟ができた時、とても嬉しかったことを覚えている。お姉ちゃんになって弟のお世話をできる喜びと、お姉ちゃんと呼んでもらえることの誇らしさ。それから十何年か経った今年、部屋を片付けていて偶然出てきたこの絵本を、私は再び手に取った。振り返ると、あの時感じた嬉しさはほんの一瞬だったのかもしれない。母と遊びたいのに、母は弟を寝かしつけていて遊べなかったり、私も可愛がってほしいのに、家族は弟に注目していて、私のことをなかなか見てくれなかったり。もちろん弟は可愛かったし、今でも可愛い。しかし私には、弟に対する嫉妬心もあったのかもしれない。弟が大きくなってからも、喧嘩をしたらまずは私が怒られ、大きいお姉ちゃんは我慢しなくてはいけない。「一人っ子だったらよかった」と何度思ったことだろう。きっと私は気づかないうちに「ちょっとだけ」我慢をしていたのだと思う。絵本の中のなっちゃんのように。

今年の夏、母は二週間近く入院した。退院するまでの間、私は普段やらない家事をした。いつもなら、ご飯を食べてすぐスマ

ホを見ているのに、ちょっとだけその時間を削って食器を洗う。いつもなら風呂から上がってゆっくりしているが、ちょっとだけゆっくりしてから洗濯をする。母がいない間、私は自分の気持ちを「ちょっとだけ」我慢して弟の分まで食器を洗い、洗濯をした。「ママ早く帰ってきて」と何度連絡をしたことだろうか。どうやら「ちょっとだけ」の我慢には限界がありそうだ。

この絵本の最後には興味深い文がある。

「なっちゃんは　ママの　においを　いっぱい　かぎながら、いっぱい　だっこしてもらいました。そのあいだ　あかちゃんに〝ちょっとだけ〟がまんしてもらいました」

「いっぱい」と「ちょっとだけ」という二つの言葉は、とても対照的だと思う。自分にとってのいっぱいは、相手にとってのちょっとだけと同じなのか。はたまた、自分にとってのちょっとだけは、相手にとってのいっぱいと同じなのか。私は弟と喧嘩をした時に、弟から「いっつも俺ばっかり我慢してる」と言われた。きっとこれは、弟自身はいっぱい我慢していて、私はちょっとだけ我慢しているということである。弟からそう言われた時は「ごめん！」という気持ちと、納得いかない気持ちがあった。私だって「いっつも私ばっかり」と思う時があるからだ。それでわかったことがある。結局みんな「いっぱい」を望んでいるし、自分のことで「いっぱい」である。ご飯はいっぱい食べたい、楽しい時はいっぱい遊びたいし笑いたい。大変な時は自分が一番いっぱい苦労しているし、いっぱい泣きたい時もある。それは自分だけでなくて、他の人もそう感じる時があるだろう。そして、父や母にやってほしいことは、私だって弟よりもたくさんある。しかし、だからこそ時々「ちょっとだけ」他の人を気にかけてみたり、遠慮したりする。「ちょっとだけ」が限界に達する前に、ちょっとだけ救いの手を差し伸べるのが思いやりだと思う。きっとその「ちょっとだけ」で救われる人がいると思う。

私の父は数年前に亡くなっている。私も弟も父と母、そして家族みんなからたくさんの愛情で育てられてきた。それはきっと、私と弟のどちらか一方が「ちょっとだけ」でも「いっぱい」でもなく平等だったのだと思う。そして父が亡くなった今でも、私と弟は何一つ不自由することなく、変わらずに生活できている。しかし、私は母からよく言われることがある。「パパがいないことで困ることがあると思う」。確かにそうかもしれない。母はどんなに一人で頑張っても、父になることはできないから。だから、そんな時は父の存在に感謝したい。そしてちょっとだけ母の苦労を理解して、時々ちょっとだけ私の気持ちも伝えたいと思う。

一人ひとりの「ちょっとだけ」から、思いやりで溢（あふ）れた世界が広がることを願って。

体験書籍
『ちょっとだけ』瀧村有子　絵／鈴木永子
福音館書店

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」

【一ッ橋文芸教育振興会賞】

読書を知る

新潟県立三条高等学校　一年

向井理湖

私は読書が嫌いだ。文章を指で追っていたはずなのに同じ行を繰り返し読んだときの苛立ち。文中の一言が気になり読み進められないときの焦り。読み終わったのに著者の伝えたいことが分からなかったときの虚無感。高校生になった今でも、私の心を惹くのは子ども向けの絵本ばかりだ。

私がこの本を選んだ理由は、読書家の姉に「読書感想文が書いてある本持ってるよ。なんか理湖みたいに本を読むのが苦手な人が書いた本」と言われ興味を持ったからだ。正直、姉の説明ではどんな本なのか想像できなかった。けれど数年ぶりに自分からこの本を読んでみたいと思った。

『本を読んだことがない32歳がはじめて本を読む』。この本はかまどさんと、その友人であるみくのしんさんとの会話によって構成されている。本に苦手意識があり読んだことがないみくのしんさんが、かまどさんに協力してもらって『走れメロス』『一房の葡萄』『杜子春』『本棚』の四作品を読んで感じたことや不思議に思ったことをありのままに書いている。この本を読んでいくうちに私はみくのしんさんと本の読み方が似ていることを実感した。それは「文章を観ている」ことだ。登場人物の容姿、表情、感情、過去、家族構成から作中の季節、時刻、天気、立ち位置まで、書かれていないことを想像して脳内で再生する。まるでオリジナル映画を作るような読み方だ。実際、みくのしんさんは『走れメロス』では場面ごとにＢＧＭを想像し、『一房の葡萄』ではホワイトボードに絵を描き、『杜子春』では主人公の立ち位置から西日と影の関係を考え、『本棚』では話し相手を予想する。かまどさんはこれを感覚型の読書と表現し

ている。おそらくこのように文章を脳内補完して読書する人は少ないのではないだろうか。

この本で一番印象に残っているのは「本当に、みくのしんは今まで一度も読書したことがないの？　国語の授業で何かしら読んだことはあると思うんだけど」「あれは『読書』じゃなくて『お勉強』でしょ」という会話だ。私はこの文章に強く衝撃を受け、同時に心惹かれた。私が読書を嫌うもう一つの理由に「正答がある」ことが挙げられる。人物像や行動動機など、本を読むうえでつかむべき要点はいくつもあり、それには模範解答がある。自由に想像しながら読む私にとって、正答がある読書は堅苦しく息苦しいのだ。しかし〝あれは読書ではなくお勉強〟という言葉に私は心を救われた。本来、読書に正解なんてものはなく、読む人ごとに異なる感想をもつおもしろさがあるから、本という文化は残り続けているのだと再認識させられた。模範解答があるのはお勉強だから、そう考えれば今までいったい何に苦しんでいたのかと不思議になるほど気が晴れた。私の読書方法はけっして一般的ではない、けれど間違いでもない。この事実がうれしくてしかたがない。

この本を通して私は、読書は自分が思っていたよりも自由であること、そして、他の人と同じだけが正解ではないことを学んだ。この本に出合う前は、自分の読書方法は周りと異なると恥じて本そのものから自分を遠ざけていた。今となっては視野が狭く軽率な行動であったと反省している。しかし、この本でみくのしんさんが読書に自由に、眩（まぶ）しいほど素直に取り組む姿に私は感動した。周りと異なることを恐れて私にはできなかった、読書と向き合う姿をかっこいいと思った。私はこの本を読み、周りと異なる方法をとるのは恥じることではないと学べた。私と同じように本を読む人がいて、読書で泣いたり怒ったり笑ったりできることを知った。

そして私は自分なりの方法で読書をしたいと思い、本の中に出てきた『一房の葡萄』を読み返すことにした。机上には本、自由帳、絵の具とカラーチャート。傍から見たらこれから読書をするなんて思いもしないだろう。けれどそれでいい、これが私なりの読書方法だ。本を読みながら出てくる色で自由帳に絵を描いた。平面の文章が立体的になるような気がして、初めて本に対して心躍った。読後、私は自由帳を見て、文中に出てきた藍色と洋紅色（ようこうしょく）を混ぜると葡萄色になることに気が付いた。文章だけではなぜ仲直りの証が葡萄なのか理解できなかったであろう。文を読んで、文を観たことで理解できた。自分にとっての読書をやっと確立できた。

私はこの本と出合って読書の楽しさを知ることができた。「本って勝手に始まらないんだよ？」。みくのしんさんの言うように読書は自分から一歩踏み出さないと始まらない。しかし、だからこそ少しの勇気と興味を持ち本に手を伸ばしたとき、想像と知識の世界にどっぷりと浸れるのだ。自分なりの読書方法を知ることが、本当の読書と出合う始まりになると私は考える。

体験書籍
『本を読んだことがない32歳がはじめて本を読む』
かまど　みくのしん　大和書房

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」

【一ッ橋文芸教育振興会賞】

僕の思う〝理解〟

岐阜県立岐阜北高等学校　二年

北川蒼太

「君のことは心からええ子やと思っていた。（中略）だけど今は正直……裏切られた気分や」

これは、高校生の聖将の父・稲男が、聖将の恋人である雄哉に放ったセリフである。学校の図書室で偶然手にしたこの本は、同性愛に対する本当の理解とは何なのかを僕に問い直すものであると同時に、同性に好意を抱いた聖将と彼を取り巻く人々を、自分と家族友人に重ねずにはいられないものだった。

この本『息子のボーイフレンド』は、タイトルから分かるように同性愛をテーマとしていて、普通の同性愛の恋愛小説に思えるが、実際には、息子が同性愛者だった事実を受け入れようとするも、どこか受け入れきれない家族の葛藤や、性的マイノリティがゆえの本人達の苦悩に焦点が当てられている。この話は聖将の母・莉緒の視点で、息子がゲイで男の恋人がいるとカミングアウトされる場面から始まる。中学生の頃僕も、親友でもあった同性の恋人がいたことがあり、母親に報告するのはとても勇気が必要だった。異性の恋人なら何の躊躇いもなく報告できたと思うが、同性となると他でもない家族にさえ受け入れてもらえない可能性があったからだ。僕は父親には反対されると思い母親にしか言えなかったが、その母親の反応もあまり嬉しいものではなかった。恋人が出来たと伝えた時は一緒に喜んでくれたが、恋人が同性だと告げると途端に母の表情が曇った。言葉を失って沈黙する母に、否定されないことに安堵しつつも肯定されない哀しさを感じた。聖将の母も頭では理解してあげたいと感じつつも心の底ではどこか受け入れきれずにおり、

自分の母親も、このような心の葛藤があったと思う。稲男が「裏切られた気分」と言ったのも決して性的マイノリティであることを批判して言ったわけではない。ただ自分の息子に周りと同じ普通の幸せを摑んでほしい願いからの言葉だ。決して自分が悪いことをしているわけではないのに、自分が皆と同じ普通ではないことで、このように親を葛藤させてしまったと思うと少し申し訳なさを感じる。物語が進み聖将視点になると、聖将本人の苦悩が描写されている。周りと違うことに焦ったこと、友人の悪意のない何気ない一言に傷ついたこと、自分がゲイだと知られて矛先が自分に向かないように友達の否定的な発言に同調したこと。どれも現実的かつ当事者にしか分からないような悩みばかりで、僕も聖将と同じことで苦しんだことがある。

この本を読んで、多様性を尊重する風潮が強まった現代となっても同性愛や性的マイノリティへの本当の理解は難しいと感じた。聖将の両親は同性愛に対して否定的でなく、むしろ肯定的な立場だ。しかしそんな二人でもそれが自分の息子だったら……となると、息子には普通に生きてほしい、後ろ指をさされながら辛い道を生きてほしくない、と願っていた。だから、そういった人々を受け入れられるかどうかは、当事者が自分の周りに現れて初めて分かるのだと感じた。今の時代、同性愛に関することなども学校で教えてくれる。それゆえ、そういった知識は広まりつつあるし周りでも差別的な発言をする人はいない。逆に、同性愛を普通に受け入れられる、と言う人も多い。しかしそれは、こういった世界は自分には無関係で、他人事だと捉えているから「自分は受け入れられる」と言えるのではないだろうか。そういった世界もあるのだと思っているうちはただの〝知識〟で、自分の身近に置き換えて初めて真の〝理解〟になるのだと考え直した。

日本では約10％の人々がＬＧＢＴＱ＋にあたると言われているが、現実には周りでそのような人のことはほとんど聞かず、息を殺して生きている人も多い。もちろん全員が全員打ち明けたいわけでなく、一生誰にも知られたくない人もいる。正解は人によって異なるが、同性愛者だからといって配慮したり気を遣ったりするのではなく、そういった面を知っても今まで通り会話し、他の友達と話すのと同じように接してくれるほうが、心の負担も減るかもしれない。僕の場合は、隣に住む幼馴染に自分がゲイだと告げても、その幼馴染は「お前はお前だから」とこれまで通り接してくれたのが救いになった。突然のことで動揺していたはずなのに、それでも僕に寄り添ってくれる優しさが僕の心を軽くしてくれた。

この作品はフィクションでありながらも、身近な人が同性愛者だったという、遠いようで近い、誰かには起こりうる話をテーマとしている。決まりきった答えはないけれど、自分の悩みや心の内を書き表したり誰かに話したりして言葉にすることが、心を軽くする一つの正解だと僕は思う。世の中の悩みは性的マイノリティだけでなく、話が変われば僕が多数に立つこともある。そんな時、僕が救われたように、誰かの心の支えになれる存在でありたいと強く思った。

体験書籍
『息子のボーイフレンド』秋吉理香子　双葉社

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

音楽を世界に連れ出して

京都府立嵯峨野高等学校　一年

牧野菜々子

「世界はこんなにも音楽に溢れている」。私も音楽の中に入ったことがある。小学5年生のとき、「春に」という曲を歌ったときのことだ。コロナ禍で1年間の休みを終えてから初めての演奏会。久しぶりに団員と、お客さんと音楽を共有できた感動は今でも覚えている。目の前に花畑が広がり、温かい春風に包まれたように感じた。しかし、6年間の合唱団生活の中で音楽の中の情景が見えたのは、この一度だけ。あれはなんだったのか。ずっと不思議だった。そんなとき、私が言語化できない音楽の魅力を詰め込んだこの本に出会った。

舞台は「芳ヶ江国際ピアノコンクール」。この世界への登竜門となるピアノコンクールに挑む4人のピアニストの物語だ。母の死からピアノが弾けなくなってしまった栄伝亜夜。妻子を持ち楽器店で働く高島明石。優勝候補のマサル・カルロス・レヴィ・アナトール。ピアノを持たずして世界的ピアニストに師事していた風間塵。4人はコンクールのライバル同士だが、お互いの音楽に影響を受け合い、どんどん高みを目指していく。

彼らは曲を通して「世界」を旅している。自分たちの見ている景色を観客と共有することさえできる。そればかりか、風間は「観客を根こそぎ彼の風景の中に連れてゆく」のだという。驚愕した。彼は音楽で観客を包容することができるほど自分の音楽を持っていた。彼は師匠と「音楽を連れ出す」という約束を交わしていた。栄伝が彼の演奏を「かつて我々が世界の中に聞き取っていた音楽を、再び世界に返している」と表現したように、彼は「世界に溢れている音楽を聴」くことで約束を守り続けている。

しかし、風間自身も答えは出せていない。どうすれば「音楽を世界に連れ出す」ことができるのだろう。

私は高島の演奏曲に一つのヒントを見出した。それは、コンクール委嘱作品である現代曲「春と修羅」である。モチーフとなった『春と修羅』は宮沢賢治の第一詩集だ。高島は賢治の世界観を表現するため、岩手県を訪れたほか、賢治の別作品も熟読していた。そして曲のカデンツァ部分に『春と修羅』の中の「永訣の朝」という詩の「あめゆじゅとてちてけんじゃ」という言葉を乗せたのだ。高島は賢治が生きてきた世界を感じて聞き取ったことによって、観客と音楽を共有することができたのだと思う。

そんなとき、所属する合唱団の東北演奏旅行に参加した。この旅は、震災を機に造られた音楽シアターや地域の人を招いた教会で復興支援コンサートを行うものだ。津波避難タワーや被災した小学校で追悼のために歌ったり、語り部さんのお話を聞いたりもした。歌ったのは、東日本大震災で被害を受けた中高生が作った曲や、東北出身の歌手が作った復興支援曲だ。演奏旅行に向けた練習の際は「このハーモニーが綺麗」「この歌詞が自分に当てはまる」「ここの部分は気持ちを込めて」など曲への漠然としたイメージしかなかった。しかし、現地を訪れてから歌うと、今まで《歌詞》だったものが、私たちから被災者の方々への《メッセージ》へと変わったのだ。「当たり前が幸せと知った」「叶えたい夢もあった変わりたい自分もいた」「どうか忘れないで　僕らはここにいる」「笑顔になりますように　幸せになりますように」と歌いながらどんどん私の頭の中で曲と情景が結びついていった。

これは高島と同じように、私自身が世界を感じたからだと思う。旧大川小学校を訪れた時だった。二次避難場所の対策をしていなかったために避難が遅れ、校庭にいた児童全員が真正面から津波にのまれたそうだ。亡くなった子どもたちは恐ろしい壁のような津波の襲撃に遭い、どれほど怖かっただろう。一瞬にして消えた街の瓦礫から我が子の遺体を探す遺族はどれほど悲しかっただろう。もし私が被災していたら、もし家族が被災していたら、と思ったら、とても怖くなったのだ。

今までの合唱の演奏では、演奏の完成度を高めようと思い歌っていたが、今回の演奏旅行では聴いてくれている人、一人一人に寄り添えるような演奏をしたいと感じた。あんな顔をして聴いてくれる人は今まで見たことがなかったから。震災について学び、とても苦しくなったから。この本を読んだから。栄伝の演奏には音の「すべてが深く、意味があり」、音に安心感がある、とあった。観客が「我々の思いを、声を、預けてよいのだ」と思えるほど。彼女が音楽で観客の人生を語るように、私も聞いてくれる人たちの思いを「代弁」できただろうか。「震災で大切な人と場所を失った悲しみを少しでも減らしたい」「音楽で笑顔を届けたい」という私たちの願いが伝わっただろうか。風間が「音楽は、常に『現在』でなければならない」と考えていたように、会う人、見る風景、歌う土地によって音楽がみるみる新しくなったように感じた。もしかしたらあのとき「音楽を世界に連れ出す」ことが少しだけ、できていたのかもしれない。

体験書籍
『蜜蜂と遠雷』恩田　陸　幻冬舎

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

愛の数式、私たちの解

熊本県　熊本信愛女学院高等学校　二年

金山夕姫乃

「普通」という言葉は、まるで透明な棘のように、いつも私の心のどこかに刺さっていた。三人姉弟を育てるシングルマザーで、車椅子に乗り生活する母。その存在が、世間が描く画一的な「普通の家族」という絵から私たちをはみ出させてきた。学校で、街角で、私たちに向けられる好奇の視線。それはときに、陰鬱なレッテルとなって投げつけられる。「かわいそう」「苦労している」。そして、あの日の教室の光景が、今も鮮やかに蘇る。「車椅子を触った手で私に触れないで、汚いから」。その言葉は、幼い私の胸に深く、深く突き刺さり、私と「普通」の間に、決して越えられない壁を築いた。なぜ、ただありのままに生きているだけで、私たちは不幸の象徴として扱われなければならないのだろうか。この問いは、私の幼い心を支配し、深い孤独を植え付けた。

そんな孤独の淵で、私は一冊の本と出会った。小川洋子さんの『博士の愛した数式』。八十分しか記憶が持続しない数学者の博士と、彼を献身的に介護する家政婦、そしてその家政婦の息子である「ルート」。彼らが織りなす物語は、私の「普通」に対する問いに、新たな視座を与えてくれた。博士の記憶が断絶する世界は、一見、不完全に見える。しかし、家政婦が毎日、初対面の相手として博士と向き合い、同じことを繰り返すひたむきさ、そこにこそ真の美しさがあった。それは「普通」ではないかもしれないが、偽りのない、温かく新しい「普通」の形だった。物語が教えてくれたのは、世間一般の価値観では測れない、真の豊かさや幸福の存在だった。

博士と家政婦が紡ぐ関係性に、私は母と

自身の姿を重ねていた。母が車椅子で生活することで直面する、物理的な制約や、周囲の無理解からくる心の痛み。それは、時に私の心にも暗い影を落とした。それでも、母は決して弱音を吐かず、どんな困難な状況でも、私を守り、育ててくれた。雨の日の外出、段差の多い場所での移動、それは常に私たちにとって乗り越えるべき試錬だった。それでも母は、私が寂しい思いをしないように、周りの子と同じように様々な経験ができるように、常に心を砕いてくれた。体育祭で、大勢の生徒や保護者が見守る中、私のクラスのテントまで車椅子を漕(こ)いで応援に来てくれたこと。その誇らしげな笑顔を、私は今も鮮明に覚えている。

博士の記憶が八十分で消えても家政婦の愛が途切れることがなかったように、母の身体的な制約や社会の偏見があっても、私たち家族の愛と絆が途切れることはなかった。むしろ、それらの困難が、私たちをより強く結びつけ、お互いを深く理解するきっかけになったのだ。博士が美しい数式に永遠を見出(みいだ)そうとしたように、母は、その存在そのもの、そして私たちへの限りない愛情を通じて、人生の美しさと尊さを教えてくれた。

私の母の愛は、博士が愛した「素数、友愛数、完全数」のように、揺るぎなく、普遍的だと信じている。世間の視線や言葉が、時に私たちを傷つけ、家族の形を否定しようとしても、母の私に対する愛情は、決して揺らぐことがなかった。それは、外からの評価に左右されない、純粋で絶対的なものだ。熱を出した夜に一晩中付き添ってくれた優しさ、夢を語ると「一生お母さんが味方だよ」と背中を押してくれた言葉。それらの記憶こそが、母の愛情を証明する「愛の数式」であり、その解は常に「無限の愛」だった。この愛の数式は、困難に直面するたびに深まり、私たち家族をより強く結びつけてくれた。

『博士の愛した数式』は、外から見た「普通」の定義がいかに表面的なものであるかを教えてくれた。真に大切なのは、互いを尊重し、心を寄せ合うこと。そして、その関係性の中に、自分たちだけの幸福を見出すことだ。母が車椅子であることは、決して「かわいそう」なことではない。それは私たち家族が築き上げてきた絆の証であり、私に他者への深い共感と豊かな想像力を与えてくれた、かけがえのない財産だ。

私が願う未来は、誰もが「普通」という枠に囚(とら)われず、ありのままに輝ける社会。私たちは皆、それぞれの「数式」を抱え、それぞれの人生を生きている。その数式がどれほど複雑で、どれほど予測不能であっても、そこに愛と理解があれば、必ず美しい解が導き出されると信じている。私はこれからも、母から教わった「愛の数式」を胸に、自らの人生を力強く歩んでいく。そして、いつかこの社会が、多様な「数式」が共存し、互いの違いを認め合い、尊重し合える、より寛容で優しい世界になることを心から願っている。

体験書籍
『博士の愛した数式』小川洋子　新潮社

中央選考委員選評

各篇に、深い余韻……。

作家 辻原 登

『一冊の本がつないだ縁』（嘉納美波）

中学三年間、陰湿ないじめを受けていた。「死んだ方がマシだ」と思うくらい。卑劣な奴らだ。そいつらを幽霊になってこらしめてやりたい。しかし、化けて出るには死ななくてはならぬ。死なずにそれが出来ないか。起死回生の策を授けてくれたのがこの本だ。「私」は、「世界一幸せな怪談師」になる。

『燃やすべきは』（北村柚乃）

「四方を山に囲まれた田舎町」で生きて来た「私」は、孤高のプライドに苛（さいな）まれている。アドレッサンス中葉特有の実存の不安だ。三島由紀夫の『金閣寺』に出会う。恐らく最も危険な読書となるだろう。しかし、「私」は強靭な思考と表現力で、『金閣寺』を通して観念の呪縛から解放されようとしている。この作品は、小さなもう一つの「金閣寺」として読むことも出来よう。

『私の心の奥底に眠る言葉』（船橋拓実）

短歌を始めた。作るうちに短歌がよくわからなくなっていく。穂村弘の『はじめての短歌』に出会う。歌う「自由」にめざめる。それは短歌自体を「私」の中で解き放つことだった。有限な言葉から無限へと展開する「自分の心の奥底に眠る言葉の連なり」の冒険へと乗り出す。近い将来、我我は船橋拓実という歌人のデビューを目にするだろう。

『「ちょっとだけ」の思いやり』（小原理子）

いつのことか覚えていないが「私」は幼い頃、『ちょっとだけ』という絵本を両親からもらった。十何年かぶりに偶然それを手に取った。「ちょっとだけ」の世界が回想と共に「私」の中で広がる。「私」には弟がいる。今年の夏、お母さんが入院した。「いっぱい」と「ちょっと」の塩梅が難しい。「思いやり」がその計りの中心に入る。終わりの方で、「私の父は数年前に亡くなっている」と告げられる。深い余韻。

『読書を知る』（向井理湖）

読む行為は多岐にわたるし、その意味も無数にある。ここでテーマとなっているのは、「本」を読む、という行為そのもの。文章を読むとはどういうことか。辻原は本を読むのが極端に遅い。欠点だと悲しんで来た。そうでもないことを教えられた。「文を読んで、文を観た」、成程！『一房の葡萄』読書のエピソードは出色。

『僕の思う〝理解〟』（北川蒼太）

男子の同性愛を描いた小説の読書体験記なのだが、北川君もまた同性愛者として、小説の主人公に寄り添うかたちで、感想を綴っていく。表現は穏健で理路整然として、少数者であることの苦悩の中から、やがて内部に籠もる強い意志に批評精神が立ちあらわれる様がすがすがしい。今回入賞作品中、最もヒューマニティーに溢れた作品。

『音楽を世界に連れ出して』（牧野菜々子）

この表題そのものが、「私」の体験書籍『蜜蜂と遠雷』の中で、作品のモチーフとして鳴り響いている。しかし、「音楽を世界に連れ出す」とは？　「私」はこのモチーフをどのようにして、現実の世界で把握することが出来たかを綴る。「私」は所属する合唱団の東北演奏旅行に参加した。その時、「私」の中で、そのことが奇跡のように実現した。

『愛の数式、私たちの解』（金山夕姫乃）

「私たち」と「普通」の間にある違和、あるいは「壁」についての慈愛に溢れた考察である。「車椅子に乗り生活する母」と「私」あるいは「私たち」（父親の姿はない）。苦難にめげず、まるで「肝っ玉母さん」のように振舞う母の姿が生き生きと描かれている。その愛の数式の解は、車椅子にあった。

飛躍、連想、矛盾の味わい

歌人 穂村 弘

『一冊の本がつないだ縁』のユニークな点は、作者の置かれた状況に対して怪談という対象の選択に飛躍が感じられるところだ。さらに、「そこには、優しい世界が広がっていた」という一文も一般的な怪談のイメージを裏切っていて印象的だった。厳しい現実から、もう一つの「優しい世界」へ。作者は読書体験を通じて、自らの生きるべき場所を発見したのだろう。「この人に会うまで生きよう」という言葉にぎりぎりの迫力を感じた。

『燃やすべきは』は、まずその云いさしのタイトルに惹かれた。さらには「私を縛り付け、なおも私を救うものは数字である」という矛盾めいた書き出し。どんどん先を読みたくなるような文体のドライブ感がある。作者の迷いや悩みが最後まですっきり消えたりしないところも良かった。一冊の本で現実の問題が解決した、という流れには無理がある。最後までもがきながら、にも拘わらず、文章のスタイルはどこまでも明晰なのだ。

『私の心の奥底に眠る言葉』には、短歌のわからなさについて書かれている。短歌のような韻文を散文で語ることはそもそも難しい。完璧に語りつくせたら、韻文の存在意義そのものが怪しくなってしまう。この作品の面白さは、散文的な記述を進めながら、そのニュアンスを補うように、ところどころに自作を含む短歌の引用を挟んでいるところである。しかも、いい歌が多い。一瞬の論より証拠。そこから生まれる独特のリズム感も魅力的だ。

『「ちょっとだけ」の思いやり』は、「ちょっとだけ」と「いっぱい」というキーワードによって、心という捉えがたい対象にアプローチしている。「いっつも私ばっかり」という不満を私も抱いたことがある。でも、たぶん相手も同じように感じているのだ。「ちょっとだけ」や「いっぱい」に計りも単位もないように、心は定量的なものではない。だからこそ、「いっつも私ばっかり」という不満を反転させて、全員が幸せになることができるのではないか。この作品には、その可能性への入り口が示されているようだ。

『読書を知る』には、読書という体験の第一歩が描かれている。どのような体験にも最初の一歩というものがある。でも、例えば、赤ん坊の体験は決して言語化されることがない。それは言葉の習得以前の出来事だからだ。この作品のユニークさは、読書というジャンルに関しての赤ちゃん的な存在が、その体験をきちんと言葉で伝えてくれるところだ。外国人が日本での体験を語る内容に、はっとさせられることがあるが、それに近い新鮮さを感じた。

『僕の思う〝理解〟』は、本の登場人物と自分自身に共通点のあるタイプの体験記である。同性愛のマイノリティ性をめぐって、本の内容と自らの体験の間を丁寧に往還するうちに、「知識」と「理解」の間のギャップが浮かび上がってくる。問題の重さの中に暗く沈みこまない前向きな文章に惹かれた。「話が変われば僕が多数に立つこともある」という自己の相対化が、オープンマインドの魅力を支えているようだ。

『音楽を世界に連れ出して』には、「言語化できない音楽の魅力」というフレーズが出てくる。確かに、音楽を文章に置き換えて表現することは難しいと思う。ただ、本作の演奏体験を踏まえて書かれた言葉には、そのハードルを越える力を感じた。作者は歌いながら頭の中で曲と情景が結びついてゆく特別な経験をした。その理由についての「私自身が世界を感じたからだと思う」という考察に意外性と説得力があった。

『愛の数式、私たちの解』は、「『普通』という言葉は、まるで透明な棘のように、いつも私の心のどこかに刺さっていた」という一文から始まる。この作品では、『博士の愛した数式』の読みを通して、当然のように信じられている「普通」という枠組みの限界が明らかにされてゆく。自らの愛の実感と小説内の数学的な概念を次々に比喩で結びながら、「普通」を乗り越えようとする思考のプロセスが美しい。

ここ以外に世界がある

作家 角田光代

『「ちょっとだけ」の思いやり』を書いた小原理子さんは、絵本の言葉から、「ちょっとだけ」という概念について考える。私たちの社会は、無意識に「いっぱい」と幸福を結びつけている。いっぱい手に入れ、いっぱい所有すること――でも本当の幸福は、他者のことをちょっとだけ思いやる、そういう社会のありかたなのではないか、という声は、今の時代にとても必要だと感じた。

向井理湖さんの『読書を知る』は、今までまったく疑問を持たず読書をしてきた私にも、読みかたの多様性を知らしめてくれる体験記だった。読書を文字どおり体験する工程に、私も興奮するようなたのしさを覚えた。読書ってこんなに自由なんだと、多くの人に伝わるといいと思う。

北川蒼太さんの『僕の思う〝理解〟』を読んで、救われたような気持ちになる人も少なくないのではないか。あることではマイノリティとされる人も、べつのことではマジョリティとなることがある。他者を理解するのには、この想像力こそが必要なはずだと、この作品は告げている。

合唱団に属する牧野菜々子さんは、土地の持つ記憶と音楽を共鳴させることで、小説に書かれている『音楽を世界に連れ出して』いくことを、体感する。同じ音楽が、そうすることでまったくあたらしいものに感じられたという素直な言葉に、世界に連れ出された音楽を私も聴いてみたくなった。

『愛の数式、私たちの解』を書いた金山夕姫乃さんは、読書を通じて「ふつう」という定義にいかに意味がないか気づく。それによって母親の愛情の強さを知り、家族のありかた、個人のありかたの多様性について考える。それにしても「陰鬱（いんうつ）なレッテル」には私も腹が立った。

勉強ができず、偏差値が何をあらわすかも知らずに大人になった私は、北村柚乃さんの『燃やすべきは』で繰り返される「数字」がなんであるのかがわからなくて、混乱したのだが、選考会の席で、テストの高得点や高順位のことだと知って納得した。競争社会の価値観にのみこまれていた自分を、端正な文章で客観的に見据えていて、印象に残った。

『私の心の奥底に眠る言葉』は、短歌の本を読みながら短歌について考え続けていく、船橋拓実さん自身の思考の過程がていねいに描かれている。有名な歌人に倣ってみて、うまくいかないことで、あらたに自分の短歌を見つけていく。引用された短歌が、ぜんぶみごとなのが、ちょっと惜しく感じた。引用される短歌もじょじょにうまくなっていけば、なお説得力があった。でも、上手なものはしかたないとも思う。

いのちを救われた、と思った経験が私にもある。私の場合は音楽だけれど、嘉納美波さんの場合は怪談語りだった。この意外性が『一冊の本がつないだ縁』の大きな魅力だ。嘉納さんは作者に会いにいき、将来の夢を持ち、その夢に向かって行動をはじめている。学校だけが世界ではないと知っていく過程が、生き生きと描かれている。世界はもっと広く、同じ夢を見る人たちもいれば、同じ価値観で生きる人たちもいる。若き日に、これを知ることが、どれほど重要なことか。もし私が今高校生だったら、嘉納さんのこの体験記に心から励まされただろうと思う。

本の世界と自らの体験をつなぐ

文部科学省
初等中等教育局主任視学官
田村　学

今年も、全国高校生読書体験記コンクールに多くの作品が応募されました。素晴らしい作品の数々に圧倒される瞬間の連続でした。読書体験記は、読書と自らの体験とを結び付け、つなぎ合わせていく行為だと思います。一冊の本との出会いが、一人一人の高校生の日々の暮らしを深まりのある豊かなものにしていくことを感じさせる作品ばかりでした。入賞作品について、感じたことを短くコメントをさせていただきます。

嘉納美波さんの『一冊の本がつないだ縁』は、『怪談売買録　死季』という書籍と出会い、その作者宇津呂鹿太郎さんとの出会いを通して、自らが生きる力を得ていく姿を、時間とともに描いています。作者との交流を重ねる中で、嘉納さんが大きく変容し、新しい自分を見出し、大きく踏み出していることに読書体験の価値を痛感しました。

北村柚乃さんの『燃やすべきは』は、『金閣寺』の登場人物と自らの生き方とを重ね合わせながら、難解な語句を巧みに使い分け深く思索しています。「数字」に代表される他者承認による自己の確立と、「自分がやりたいと思う」自己承認による自己の確立の挟間に立ちながらも、確かな成長を刻み続けている作者の姿に驚かされました。

船橋拓実さんの『私の心の奥底に眠る言葉』は、短歌を文中にちりばめながら、『はじめての短歌』の読書体験記を独自の様式で記しています。自身の創作した短歌自体が、その時々の短歌との向き合い方を象徴的に表しています。文芸創作を生涯の目標と決意するに至る成長を感じることができました。

小原理子さんの『「ちょっとだけ」の思いやり』は、絵本『ちょっとだけ』を自らの幼少期と結び付けています。一つの言葉を自分自身の体験とつなげて考え続けていく中で、言葉が発話者中心の思考を生みやすいことに気付き、だからこそ、他者の視点や目線が大切であることに気付く姿に共感しました。

向井理湖さんの『読書を知る』は、『本を読んだことがない32歳がはじめて本を読む』を通して、読書の姿をカラフルに示しています。インプットをイメージさせる読書は、アウトプットし表現することで豊かに理解することが可能であることを明らかにし、自分らしい読書方法を追い求める楽しさを示しています。

北川蒼太さんの『僕の思う〝理解〟』は、『息子のボーイフレンド』と自分自身の経験とを関連付けて読み深めています。同性愛を通して考える社会の有り様、自らの目指すべき理想の行為を熟考し続ける中で、「自分の身近に置き換えて初めて真の〝理解〟になる」と自らの思考の高まりを高らかに宣言しています。

牧野菜々子さんの『音楽を世界に連れ出して』は、『蜜蜂と遠雷』の読書を通して、日常の合唱団による音楽活動を深く意味付けています。「観客と音楽を共有すること」「私自身が世界を感じること」などを実感しながら、演奏を通して、音楽が、人や風景、土地に合わせて新しくなっていくことの素晴らしさを記しています。

金山夕姫乃さんの『愛の数式、私たちの解』は、孤独の中、『博士の愛した数式』と出会い、博士と家政婦との関係を自らと母親との関係に重ね読み込んでいます。寛容で優しい世界を目指す金山さんの原点は、母親の優しさとその記憶こそが「愛の数式」であり、その解は「無限の愛」であると語る姿にあります。

入賞された作品は、どれも本を丁寧に読み、自らの生活経験や日常の暮らしとの関係を明らかにし、今ある自分を確立したり、未来の自分を鮮明に思い描いたりしているように感じました。読書することの意味とそこでの思いや願い、問いや疑問を言葉に表すことの大切さを目の当たりにすることができました。

それぞれの読書体験

全国高等学校長協会　林　達也

今回も高校生の読書体験記を読み、人の生き方が異なるように、読み方も人それぞれであることを再発見することができた。読書の楽しみは決して追体験、疑似体験ではなく、読書そのもの、読書体験を身体化することである。

嘉納美波さんの『一冊の本がつないだ縁』では、怪談師の存在が身近にあることを知り、自分の無知を恥じながらも驚いた。いじめに苦しんだ嘉納さんにとって希望の光は怪談との出会いであった。怪談に「優しい世界」の広がりを感じ、「謙虚に生きる」ことを知り希望を見出したというのは、意外性もあり興味深かった。怪談が生身の人間による「語り」であり、聞き手と場所を共有する関係性によるものなのだろうか。

北村柚乃さんの『燃やすべきは』では、『金閣寺』を読み自分の悩みを学僧の思いと同化させ、北村さん自身の悩みを昇華させようともがいている姿が目に浮かぶ。北村さんは親元を離れ進学校で生活し、閉塞感に苛まれているようだ。北村さんが自身の悩みにまっすぐに向き合っていることが伝わってきて読んでいる側が苦しくなる文章であった。北村さんには吉田修一さんの『横道世之介』を読んでほしい。

『私の心の奥底に眠る言葉』の船橋拓実さんは、「短歌ってよくわからない」と述べながらも、文章にちりばめられた短歌はどれも、読み飛ばすのではなく思わず一度止まって反芻してしまう。全国大会で優勝しているのだから当たり前ではある。「何が正解なのかがわからなかった」と悩みながら、「解答」を探す姿勢は愚直であり好感が持てた。

小原理子さんの『「ちょっとだけ」の思いやり』は、「ちょっとだけ」と「いっぱい」の対照であるが、なかなか深く考えさせられた。効率化、コスパ、タイパ重視の風潮で「ちょっとだけ」ずるをする、「ちょっと」ぐらい、いいじゃないかという思いが世にあふれている。楽しみや、幸福をみんなで「ちょっと」ずつ分け合う世界は、きっと幸せな世界なんだろうなと思う。

向井理湖さんの『読書を知る』は、挑戦的に「私は読書が嫌いだ」で始まる。向井さんの読書嫌いは「読み」に正解を求めることへの違和感であり、異議申し立てだ。読書は自分が楽しむためにする行為であり、結果として他者と共有することはあっても、それは「おまけ」に過ぎない。向井さんは読書することで色や景色が浮かび絵を描いているという。なんと豊かな読書体験であることか。

北川蒼太さんの『僕の思う〝理解〟』は、多様性の尊重が言葉倒れになっている現実社会を照射している。頭では理解できても、感情は追いつかない。自分のあるがままの姿をさらけ出すことを躊躇せざるを得ない社会、自分を隠さなければ生きていけない社会は、存在を否定されることだ。北川さんは「少数派」であるが故に「多数派」では持ちえない感性、視点を持っている。北川さんの「誰かの心の支えになれる存在でありたい」という思いを深く受け止める。

『音楽を世界に連れ出して』を書いた牧野菜々子さんは、東北の被災地を訪問し、曲と情景を結びつけることで歌に思いを乗せることができたという。その土地の記憶と音楽を共鳴させた体験が生き生きと描かれている。思いを伝えることの醍醐味、喜び、達成感が伝わってくる文章であった。その思いは演奏する側と聴く側との共同体験により生み出されるのである。

金山夕姫乃さんの『愛の数式、私たちの解』を読み、まだこんな差別があるのかと驚き悲しくなった。「車椅子を触った手で私に触れないで」とは、初めて聞く言葉で衝撃であり、とても嫌な気持ちになった。この思いを吹き飛ばしたのは、金山さんが母親の愛情を実感できたからだ。『博士の愛した数式』から普遍の愛を読み取ったのも読書の賜物である。

第45回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者（敬称略）

（　）内は体験書籍名

【優良賞】　39編

岩手県	県立	北上翔南高等学校	三年	髙橋まりな	一センチの視点がくれた自信（『+1cm（プラスイッセンチ）たった1cmの差があなたの世界をがらりと変える』）
宮城県	私立	宮城学院高等学校	二年	鈴木萌衣花	ささやかな幸せ（『トンネルの森　1945』）
山形県	県立	山形西高等学校	二年	冨樫侑乃	味わう心で広がる世界（『貧乏ピッツァ』）
福島県	私立	聖光学院高等学校	二年	神山　翔	祈りとの出会い（『はじめての祈り』）
茨城県	私立	水城高等学校	一年	小室裕香	みなしごの灯とともに（『宇宙のみなしご』）
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	二年	大和田茉央	見過ごしたくないこと（『しろがねの葉』）
群馬県	県立	前橋女子高等学校	二年	山田未采	寄り添うということ（『明日の子供たち』）
埼玉県	私立	栄北高等学校	一年	北條沙季	ステップの先に（『ダンス部ノート』）
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	會澤未悠	私の中の「箱」（『自分の小さな「箱」から脱出する方法』）
東京都	都立	杉並総合高等学校	二年	小池梨夏	灰色のスカート（『増補版　九十歳。何がめでたい』）
神奈川県	県立	平塚支援学校	二年	柏木　凛	家族といつかすごせるように（『ライオンのおやつ』）
富山県	県立	富山中部高等学校	一年	田村有希奈	違いがつなぐ優しい社会へ（『「コーダ」のぼくが見る世界　―聴こえない親のもとに生まれて』）
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	一年	岡本彩良	隻手の声（『「コーダ」のぼくが見る世界　―聴こえない親のもとに生まれて』）
福井県	県立	羽水高等学校	二年	花山芽咲	一晩の革命（『夢十夜・草枕』より「夢十夜」）
山梨県	県立	吉田高等学校	二年	加藤景己	進むべき道（『点・線・面』）
長野県	私立	松本第一高等学校	一年	太田みの梨	視覚の枠（『目の見えない人は世界をどう見ているのか』）
静岡県	県立	藤枝東高等学校	三年	小長谷里々葉	止まらない時間の中で、私は何度も立ち止まる（『君は月夜に光り輝く』）
愛知県	県立	時習館高等学校	一年	大谷一華	きっかけ（『「コーダ」のぼくが見る世界　―聴こえない親のもとに生まれて』）
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	田中優彩	私たちはもうサイボーグだった（『サイボーグ時代　リアルとネットが融合する世界でやりたいことを実現する人生の戦略』）
滋賀県	県立	高島高等学校	二年	亀尾麻帆	○○だから（『日下部くんには日傘が似合う』）
大阪府	私立	関西創価高等学校	二年	小西梨音実	一人の人間として（『破戒』）
奈良県	県立	郡山高等学校	二年	神　絢菜	人生はカラフル（『カラフル』※森絵都著）
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	山本優大	先人たちの情熱（『フェルマーの最終定理』）
鳥取県	私立	青翔開智高等学校	一年	太田彩葉	色を紡ぐ（『檸檬先生』）
島根県	県立	松江南高等学校	二年	高梨　葵	できないを認めて（『一リットルの涙　難病と闘い続ける少女亜也の日記』）

岡山県	県立	岡山城東高等学校	一年	頓宮琉太	「平和」のために僕ができること（『昭和史　1926―1945』）
広島県	私立	武田高等学校	一年	古籏あさひ	誰がこの境界を決めるのか（『ふるさとって呼んでもいいですか　6歳で「移民」になった私の物語』）
山口県	県立	下関中等教育学校　高等部	二年	橋本和虎	万人ウケの感覚（『Heartening English Communication Ⅱ』より「The Selfish Giant」）
徳島県	市立	徳島市立高等学校	一年	稲井優芽	本当に欲しかったもの（『ダイエット幻想――やせること、愛されること』）
香川県	県立	高松高等学校	二年	重田雪妃	障がい者記念日（『「コーダ」のぼくが見る世界　―聴こえない親のもとに生まれて』）
愛媛県	県立	松山東高等学校	三年	石川泰地	溶けるバターをメディアはどう切るか（『BUTTER』）
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	中野紗和	見えない声と向き合う（『「コーダ」のぼくが見る世界　―聴こえない親のもとに生まれて』）
福岡県	私立	祐誠高等学校	一年	米田桃子	力いっぱい生きる（『堕落論』より「教祖の文学　―小林秀雄論―」）
佐賀県	県立	佐賀西高等学校	二年	稲福侑真	旅＝景色×時間×労力（『いつも旅のなか』）
長崎県	県立	長崎東高等学校	二年	藤本峻雅	声なき声を聞ける教師になるために（『52ヘルツのクジラたち』）
大分県	私立	昭和学園高等学校	二年	田邉璃奈	一つではない別れのかたち（『サイレント・ブレス　看取りのカルテ』）
宮崎県	県立	宮崎西高等学校	二年	草刈咲桜	関わり方を探る（『破戒』）
鹿児島県	私立	尚志館高等学校	二年	下戸良佑	繋がる（『星の王子さま』）
沖縄県	県立	普天間高等学校	一年	大城陽子	立ち止まることも行動（『心療内科医が教える本当の休み方』）

【入選】188編（各県の校名・氏名は五十音順）

北海道	道立	岩見沢高等養護学校	二年	阿部晟斗	思い出のページを開いて（『チポリーノの冒険』）
	道立	帯広柏葉高等学校	二年	井上颯太	生き延びるという選択（『流れる星は生きている』）
	道立	札幌月寒高等学校	一年	對馬有梨沙	甘く苦く（『さよならドビュッシー』）
	市立	市立札幌開成中等教育学校　高等部	二年	藤田さくら	喜びの島（『蜜蜂と遠雷』）
青森県	県立	十和田工業高等学校	三年	高見冬輝	六音の言葉（『ノーサイド・ゲーム』）
	県立	八戸高等学校	一年	瀧澤功太郎	私との邂逅（『梶井基次郎全集』より「過古」）
	県立	八戸中央高等学校	一年	佐川稜人	本音と嘘（『人間失格』）
	県立	八戸東高等学校	二年	前田詩歩	真夜中を切り裂け（『真夜中を切り裂け！』）
岩手県	県立	黒沢尻北高等学校	二年	小原奈々	見た目という呪縛（『私たちは「見た目」とどう向き合うか　ルッキズムを考える』）
	県立	黒沢尻北高等学校	三年	大川葉月	言葉と行動で世界を貫け―「不羈不奔」考―（『椎名素夫回顧録　不羈不奔』）
	県立	盛岡第四高等学校	二年	竹内結羽	私の物語（『神に愛されていた』）
	県立	盛岡第四高等学校	二年	細川　凜	宿題だから書きました。（『哲学史入門Ⅱ　デカルトからカント、ヘーゲルまで』）
宮城県	県立	泉松陵高等学校	二年	佐々木　和	弱さとともに生きることを決めた私は（『傷を愛せるか　増補新版』）
	私立	仙台育英学園高等学校	三年	加茂　瑞	コロナ禍の葛藤と希望（『この夏の星を見る』）

県立	古川高等学校	二年	庄子ほの香	良い人生を送るために（『もしあと1年で人生が終わるとしたら』）
私立	宮城学院高等学校	二年	斎藤真帆	私の好きな食べ物は（『好きな食べ物がみつからない』）
秋田県	秋田北高等学校	二年	齊藤由菜	言葉の魅力（『世界でもっとも貧しい大統領 ホセ・ムヒカの言葉』）
県立	秋田北鷹高等学校	一年	星　有	「めんどくさい」に立ち向かう（『「めんどくさい」がなくなる本』）
県立	秋田南高等学校	二年	菅原凜子	揺蕩う（『こゝろ』）
県立	大曲高等学校	一年	千葉愛華	私を強くした言葉（『人生を変えたコント』）
山形県	山形西高等学校	一年	田中愛夏	多様性を尊重できる人間（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
県立	山形西高等学校	二年	川崎悠珠	感謝と責任のあいだで（『救われてんじゃねえよ』）
県立	山形南高等学校	二年	武田悠聖	平和のバトンを繋ぐ（『「ヒロシマ　消えたかぞく」のあしあと』）
県立	山辺高等学校	一年	相田典子	食べることは生きること（『わたしは食べるのが下手』）
福島県	安積黎明高等学校	一年	水野希愛	みんなとは違う自分を好きになるために（『わたしはASD女子　自閉スペクトラム症のみんなが輝くために』）
私立	聖光学院高等学校	三年	江崎　優	「障害」と「障がい」（『自閉症の僕が跳びはねる理由』）
私立	聖光学院高等学校	三年	大沼あすか	感動の根源（『感動をつくれますか?』）
県立	相馬高等学校	一年	小廹はるひ	私の正解（仮）（『檸檬先生』）
茨城県	水城高等学校	一年	沼田優菜	私の食卓の変化（『世界の食卓から社会が見える』）
私立	智学館中等教育学校 高等部	一年	得居美沙姫	幸福」になりたい（『月と六ペンス』）
県立	鉾田第一高等学校	一年	石橋結遥	小さな愛で世界は広がる（『博士の愛した数式』）
県立	水戸第一高等学校	一年	佐々木蒼梧	無性に生きた僕達は（『性別「モナリザ」の君へ。』）
栃木県	小山工業高等専門学校	一年	岩﨑心美	執着を断ち切って（『走れメロス』より「駈込み訴え」）
国立	小山工業高等専門学校	二年	安藤朱里	わたしとワタシ（『思い出とひきかえに、君を』）
国立	小山工業高等専門学校	三年	大貫花鈴	ロボットと向き合い、自分と向き合う（『知的複眼思考法　誰でも持っている創造力のスイッチ』）
県立	真岡女子高等学校	二年	押久保希美	ニーシャーへ（『夜の日記』）
群馬県	桐生高等学校	二年	田沼京栞	自分で生きる力を（『西の魔女が死んだ』）
県立	渋川女子高等学校	一年	山田寿々穂	伝えることと絆（『たそがれ大食堂』）
私立	高崎健康福祉大学高崎高等学校	一年	坂井清花	心をつなぐ言葉の力（『銀河の図書室』）
県立	高崎女子高等学校	二年	外所幸恵	まだ見つかっていない「コント」（『人生を変えたコント』）
埼玉県	栄北高等学校	一年	河田妃代	自分のペースで歩む幸せ（『私は私のままで生きることにした』）
私立	栄北高等学校	一年	松本椛蓮	我、星の如くあらんことを（『汝、星のごとく』）
私立	城西大学付属川越高等学校	二年	為永　亮	僕のムルマ（『翻訳できない世界のことば』）
私立	星野高等学校	二年	石原千妃呂	永遠（『永遠の出口』）

千葉県	私立	千葉黎明高等学校	一年	師岡紗里衣	友だち（『きみの友だち』）
	私立	千葉黎明高等学校	二年	坂戸海心	「そうぞうりょく」を磨きたい！（『先生、しゅくだいわすれました』）
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	一年	穴田暖乃	便利の代償（『#スマホの奴隷をやめたくて』）
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	関　武瑠	僕の日日是好日（『日日是好日　―「お茶」が教えてくれた15のしあわせ―』）
東京都	私立	駒澤大学高等学校	二年	髙橋景介	弱さは敗北の証明ではない（『ノーゲーム・ノーライフ』）
	私立	早稲田大学高等学院	三年	鈴木裕永	平打ち麺（『地下鉄に乗って』）
	私立	早稲田大学高等学院	三年	千野日奈太	何のために生まれて何のために生きるのか（『あんぱんまん』）
	私立	早稲田大学系属早稲田実業学校 高等部	三年	後藤結衣	蟹の脱皮（『西の魔女が死んだ』）
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	浅野さくら	あの一年を大切に（『この夏の星を見る』）
	私立	聖ヨゼフ学園高等学校	一年	桐生くるみ	現代の人間椅子（『100分間で楽しむ名作小説　人間椅子』）
	私立	聖ヨゼフ学園高等学校	一年	中越悠太	光州から未来への宿題（『少年が来る』）
	県立	横浜氷取沢高等学校	二年	鍋嶋菜実	好きを探せる自分を好きに（『檸檬』）
新潟県	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	三年	八百枝奈瑠	「ポジティブ」に捉えるか、「ネガティブ」に捉えるか（『砂の女』）
	県立	新潟高等学校	一年	大野真由子	向き合う勇気（『カラフル』※森絵都著）
	県立	新潟高等学校	一年	松縄ももこ	闘う舞踊団（『闘う舞踊団』）
	私立	新潟清心女子高等学校	一年	齋藤遥香	考察とインターネット（『恐竜まみれ　―発掘現場は今日も命がけ―』）
富山県	県立	高岡南高等学校	二年	山崎　葵	小さな言葉、大きな力（『二人一組になってください』）
	県立	砺波高等学校	一年	浦井千晶	時代を超えて（『モモ』）
	県立	砺波高等学校	二年	西　汐音	失われた未来と今を生きる私たち（『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』）
	県立	富山商業高等学校	三年	船田吏彩	小さな幸せ、味わう人生（『ライオンのおやつ』）
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	一年	後谷愛心	私と本（『また、同じ夢を見ていた』）
	国立	金沢大学附属高等学校	一年	上坂　諒	ふるさと山口から得た学び（『県都物語――47都心空間の近代をあるく』）
	県立	金沢二水高等学校	一年	池下珠生	迷路の中で見つけた勇気（『チーズはどこへ消えた?』）
	県立	鹿西高等学校	一年	宮本夢奈	向き合う勇気（『朔と新』）
福井県	県立	大野高等学校	一年	上山雄生	僕が見た太平洋戦争（『ぼくが見た太平洋戦争』）
	県立	勝山高等学校	二年	廣田真里菜	敵を撃つ手の中に握ったもの（『同志少女よ、敵を撃て』）
	県立	藤島高等学校	二年	多賀谷柚希	背筋をのばして（『夜のピクニック』）
	県立	若狭高等学校	三年	竹内唯紗	書とは何かを考える（『書とはどういう芸術か　筆触の美学』）
山梨県	県立	甲府南高等学校	一年	小林甘実	先入観をひっくり返す（『逆ソクラテス』）
	私立	駿台甲府高等学校	一年	小澤有理	哲学者でありたい（『猿橋勝子という生き方』）

	私立	日本航空高等学校	一年	久保田芽美	あたたかな不完全（『「のび太」が教えてくれたこと』）
	私立	日本航空高等学校	三年	丸谷初咲	目には見えない重さを、伝えるために（『舟を編む』）
長野県	県立	中野西高等学校	二年	玉井結心	本当の正しさとは（『ナイン』）
	私立	松本国際高等学校	二年	磯本　葵	私をつくりあげるもの（『The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian』）
	私立	松本第一高等学校	一年	金井美乃	夢に生きる覚悟（『ONE DANCE　―世界で夢を叶える生き方―』）
	私立	松本第一高等学校	一年	油井玲寧	信念を描くということ（『君たちはどう生きるかの哲学』）
岐阜県	県立	加茂高等学校	二年	梅村こころ	七つの顔、一人の自分（『水曜日が消えた』）
	県立	岐阜北高等学校	一年	田口七星	風の形（『明日の僕に風が吹く』）
	私立	多治見西高等学校	二年	佐藤仁依奈	猫に教わったちょっと楽な生き方（『猫は、うれしかったことしか覚えていない』）
	県立	本巣松陽高等学校	二年	並河里玖	自分らしさの肯定法（『100日後に別れる僕と彼』）
静岡県	私立	静岡英和女学院高等学校	二年	森田瑠奈	共に「大人」になる（『ののはな通信』）
	私立	浜松学芸高等学校	二年	手嶋いづみ	知識（『フェルマーの最終定理』）
	県立	浜松西高等学校	一年	中畑恵衣	言葉（『銀河の図書室』）
	私立	不二聖心女子学院高等学校	一年	大野瑠子	あの日の空の色（『青い絵本』）
愛知県	私立	愛知淑徳高等学校	一年	福山　澪	優しさが、音になった（『Masato』）
	私立	国際高等学校	二年	野口愛令	死を考える（『新編　銀河鉄道の夜』）
	私立	椙山女学園高等学校	一年	福山絵里奈	学びの先に広がる世界（『なんのために学ぶのか』）
	県立	豊橋東高等学校	二年	太田敦子	最高の作品（『最後の一葉』）
三重県	私立	暁高等学校	一年	水谷未来	軋轢が毒を抜く（『死にがいを求めて生きているの』）
	私立	暁高等学校	二年	橋本結月	魔法の杖はないけれど。（『劣等感はあなたのせいではない』）
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	加藤心優	戦後八十年を生きる私たち（『COCOON』）
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	山口雄大	初夜の果てに（『いのちの初夜』）
滋賀県	私立	幸福の科学学園関西高等学校	一年	西口悠那	私の「ヒーロー」（『僕のヒーローアカデミア』）
	県立	玉川高等学校	二年	川﨑大湖	この本が思い出させてくれたこと（『西の魔女が死んだ』）
	県立	東大津高等学校	一年	山本穂迦	自分と向き合うこと（『成瀬は信じた道をいく』）
	県立	水口東高等学校	二年	森井ちひろ	国境を越えた先に見えたもの（『赤と青のガウン　オックスフォード留学記』）
京都府	府立	嵯峨野高等学校	一年	森本心晴	コミュニケーションの真髄（『少年と犬』）
	府立	東宇治高等学校	二年	東條茉生	苦しみごと自分を咲かせてやる（『置かれた場所で咲きなさい』）
	府立	洛西高等学校	二年	奥村和香	今ここにいる（『収容所から来た遺書』）
	私立	洛星高等学校	一年	藤田結悟	哲学のす、め（『ニーチェが京都にやってきて17歳の私に哲学のこと教えてくれた。』）

大阪府	私立	ヴェリタス城星学園高等学校	三年	羽根泉美	ハムレットと先生（『ハムレット』）
	私立	ヴェリタス城星学園高等学校	三年	門前里奈	交錯する視線（『箱男』）
	府立	天王寺高等学校	二年	竹内蒼太	悩んできたこと（『スマホ時代の哲学』）
	私立	明浄学院高等学校	一年	小川紗英	相手を知ること（『夜明けのすべて』）
兵庫県	私立	小林聖心女子学院高等学校	一年	村田深悠	言葉の力（『真夜中の底で君を待つ』）
	県立	高砂南高等学校	一年	久保田穂香	52ヘルツの壁（『52ヘルツのクジラたち』）
	県立	長田高等学校	一年	北内心寧	「違い」を超えたその先に（『アーモンド』）
	県立	姫路西高等学校	二年	宮田悠衣	「死」は幸せの道しるべ（『ライオンのおやつ』）
奈良県	県立	畝傍高等学校	一年	今田光怜	命をつなぐ（『生き物にとって死とはなにか』）
	県立	畝傍高等学校	一年	吉川日菜子	今、死の裏側に立っている（『きのうの影踏み』より「七つのカップ」）
	県立	青翔高等学校	二年	時山友里	失敗から芽生えたアイデア（『マリアビートル』）
	県立	高田高等学校	一年	片岡心音	心で踊るオーロラ姫（『眠れる森の美女　クラシックバレエおひめさま物語』）
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	髙橋希月	普通（『「コーダ」のぼくが見る世界　―聴こえない親のもとに生まれて』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	竹田千花	チャーリイと私（『アルジャーノンに花束を』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	山田菜桜	言えなかった「本音」（『腹を割ったら血が出るだけさ』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	出水櫻子	自分の道を歩む覚悟（『母という呪縛　娘という牢獄』）
鳥取県	県立	境港総合技術高等学校	二年	松本心夏	「できない」から見つけた私の宙（『宙わたる教室』）
	県立	鳥取西高等学校	一年	松下　吹	死がそばにある日常（『余命一年と宣告された僕が、余命半年の君と出会った話』）
	県立	鳥取西高等学校	二年	森山優羽	善意の刃（『「コーダ」のぼくが見る世界　―聴こえない親のもとに生まれて』）
	県立	米子高等学校	一年	影山優衣香	人は一つの顔だけで生きていない（『荒野のおおかみ』）
島根県	県立	出雲高等学校	二年	常松勇太	「自分」を貫く（『フロントライン』）
	県立	松江北高等学校	二年	﨑山　樹	信頼（『僕は上手にしゃべれない』）
	県立	松江北高等学校	二年	角田悠美	私とチューバ（『チューバはうたう』）
	県立	吉賀高等学校	一年	川上凜央	届かない声が教えてくれたこと（『52ヘルツのクジラたち』）
岡山県	県立	井原高等学校	三年	茅本留佳	障がいと生きる私の人生（『手足のないチアリーダー』）
	県立	倉敷天城高等学校	一年	秋葉うた	私の愛（『35年目のラブレター』）
	私立	創志学園高等学校	二年	柴田晃瑠	博士が教えてくれた家族の時間（『博士の愛した数式』）
	国立	津山工業高等専門学校	三年	福島一伸	未来を輝かせる選択とは？（『トビタテ！ 世界へ』）
広島県	私立	武田高等学校	二年	武本佳奈	限られた時間の中で輝く命（『君の膵臓をたべたい』）
	国立	広島商船高等専門学校	二年	門井亜衣子	手紙の想い出（『ふたりはともだち』）

	国立	広島商船高等専門学校	二年	名越海志	口は災いの元（『口に関するアンケート』）
	市立	広島市立基町高等学校	一年	藤井智佳子	好きこそものの上手なれ（『ブルーピリオド』(11)）
山口県	県立	厚狭高等学校・厚狭明進高等学校	一年	住吉由衣	トラウマと幸い（『銀河の図書室』）
	県立	岩国商業高等学校	二年	冨土原理子	戦後八十年を迎えて（『アメリカひじき・火垂るの墓』）
	県立	下関中等教育学校 高等部	二年	飯田堅人	冷戦から見る人間の本性（『ヨーロッパ冷戦史』）
	県立	下関中等教育学校 高等部	二年	金次七杷	「鬼滅の刃」の精神論が繋がること（『鬼滅の刃』）
徳島県	私立	生光学園高等学校	三年	赤澤啓作	いずれとける飴（『海辺のカフカ』）
	県立	徳島北高等学校	二年	都築愛生	知識が照らす生きる道（『大人の発達障害 仕事・生活の困ったによりそう本』）
	私立	徳島文理高等学校	一年	戸川壮祐	僕が好きな季節（『眉山』）
	県立	名西高等学校	二年	武田結衣	私が音楽を続ける理由（『銀河の図書室』）
香川県	県立	高松高等学校	一年	寺竹彩結	自分と向き合えた夏 ～『くちびるに歌を』を読んで～（『くちびるに歌を』）
	県立	高松高等学校	一年	福島楓花	コーダの思い（『「コーダ」のぼくが見る世界 ―聴こえない親のもとに生まれて』）
	県立	高松工芸高等学校	二年	福家　慧	大事なのは事が起こった後（『最新改訂版　アスリートのためのスポーツ栄養学』）
	県立	飯山高等学校	三年	四角心愛	余命を知ること（『告知』）
愛媛県	県立	宇和島東高等学校	二年	竹内茉桜	通学電車と私の物語（『終電の神様』）
	県立	新居浜西高等学校	一年	齊藤弘哉	雪山に映る人間の奥底（『生還者』）
	県立	松山北高等学校	二年	細川遥翔	吃音と自分の生き方を俯瞰して（『僕は上手にしゃべれない』）
	県立	三島高等学校	一年	田中やや	ひと目ぼれ（『ジヴェルニーの食卓』）
高知県	県立	窪川高等学校	三年	間﨑亜美	食べることは、誰かと生きること（『カフネ』）
	私立	高知学芸高等学校	二年	中平綾乙	アンテナを向けて（『ドキュメント』）
	市立	高知市立高知商業高等学校	一年	塩次凛花	私が私でいること（『赤毛証明』）
	私立	土佐女子高等学校	二年	山口心々実	移ろう環境で、揺れる「自分」との共生（『何者』）
福岡県	県立	修猷館高等学校	二年	岸原凜々子	十七歳の今、考えること（『書店ガール』）
	県立	筑紫丘高等学校	一年	日置　渚	見えない心にかける橋（『自閉症の僕が跳びはねる理由』）
	私立	明治学園高等学校	一年	梶原さくら	死なせる勇気、延ばす責任（『最後の医者は桜を見上げて君を想う』）
	県立	門司大翔館高等学校	一年	高宮優斗	本が変えてくれた人生（『夜と霧』）
佐賀県	県立	唐津東高等学校	一年	吉田耕史朗	あと少し、もう少しその先へ（『あと少し、もう少し』）
	県立	唐津東高等学校	二年	川原彩愛	信じるということ（『怒り』）
	県立	佐賀西高等学校	一年	小林維吹	吃音症に向き合って（『青い鳥』）
	県立	武雄高等学校	一年	平野由季	ありのまま（『どうしてわたしはあの子じゃないの』）

長崎県	県立	佐世保北高等学校	一年	菅　世凛叶	無意識の偏見と向き合って（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
	県立	猶興館高等学校	一年	加藤陽菜	自分なりの「普通」を大切に（『水を縫う』）
	県立	猶興館高等学校	一年	久冨叶依	自分の道を歩む（『嫌われる勇気　自己啓発の源流「アドラー」の教え』）
	県立	猶興館高等学校	一年	村田　慈	死にたかった私へ（『カラフル』※森絵都著）
熊本県	私立	九州学院高等学校	三年	蔵田誠士郎	人生の分岐点（『嫌われる勇気　自己啓発の源流「アドラー」の教え』）
	県立	熊本高等学校	一年	田原佳歩	主観と客観（『文字禍・牛人』より「文字禍」）
	県立	熊本商業高等学校	一年	濱田竜生	夢を追うために、金を学ぶ（『夢と金』）
	市立	熊本市立必由館高等学校	二年	小川莉温	小さな一歩から大きな夢へ（『夢をかなえるゾウ』）
大分県	県立	大分上野丘高等学校	二年	江藤とも	「本当の自分」として生きる（『人間失格』）
	県立	大分豊府高等学校	二年	釘宮律音	追憶（『レゾンデートルの祈り』）
	県立	杵築高等学校	二年	髙倉想那	「男らしさ」「女らしさ」とは何か。（『水を縫う』）
	私立	明豊高等学校	一年	干潟凛子	心の声が導く場所（『アルケミスト　夢を旅した少年』）
宮崎県	県立	五ヶ瀬中等教育学校 高等部	二年	大塚彩穂衣	私の背中を押す言葉（『戦争は女の顔をしていない』）
	県立	妻高等学校	二年	菊田亜海	子どもと大人（『星の王子さま』）
	国立	都城工業高等専門学校	四年	増森涼太	数学が響かせるもの（『春宵十話』）
	私立	宮崎第一高等学校	二年	中嶋みどり	白い蛾と黒い羊（『霊媒の話より）題未定　―安部公房初期短編集―』より「白い蛾」）
鹿児島県	県立	錦江湾高等学校	一年	南　寛飛	先入観の打破（『脱炭素化は地球を救うか』）
	県立	垂水高等学校	一年	菊地原結依姫	私は選んでここにいる（『君の膵臓をたべたい』）
	県立	鶴丸高等学校	一年	安樂和奏	肯定する力（『ナナメの夕暮れ』）
	県立	鶴丸高等学校	一年	宇都ななみ	夢を縫い合わせて（『ミシンの見る夢』）
沖縄県	県立	球陽高等学校	三年	バーナード千夢	豊かな世界のために（『国際協力師になるために』）
	県立	向陽高等学校	三年	大城彩里佐	ありのまま（『こんな世の中で生きていくしかないなら』）
	県立	宮古高等学校	二年	前田みぞれ	再び、夢に温度を（『ブルーピリオド』）
	県立	宮古高等学校	二年	宮國心和	「欠点」ではなく「個性」（『なっちゃんの声　学校で話せない子どもたちの理解のために』）

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名などは、「一ツ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。（2月初旬予定）
http://www.hitotsubashi-bks.jp

イラスト／結布
デザイン／テラエンジン